

長唄 木花之開耶姫 桜の誓い

底本 秀真伝

作詞 大中臣正比呂

遠く久しき古に、我らは人の命を創りたり。

万の試み遂げし後、国津に八柱姿あり。

黒、赤、黄、白、これに二性を結び成し

四方に植えてし八柱は、やがて妹背を生み広げ、地上に声は響きたり。

億年の時経て臨む中津国、火山を鎮めし麓には豊葦原の稻穂あり。

大八洲 生みし命の樹は榮えて

富士の裾野に訪ね来たりし

八洲巡りし瓊瓊杵には国立つ智恵をば携えて

高見の山に至りては、豊津芦原美しく、

富士の国はと心固めり。

大山祇は喜びて大君を坂折宮に迎えたり。

狭名田で酒解く天甜酒を宴の舞に持ち注ぐ

見目麗しきもてなしに、

一目に惚れて留め置き、一夜の契りと抱き寄せて

問ひし名前は葦津姫、大山祇の娘なり。



明日は八幡日、急ぎ旅 伊勢に返して三宝

押し戴きて大嘗の祀り果せし瓊瓊杵尊、

日追いても恋いの想いは止みがたく、御幸の布を雉鳩に

海路を駿河に急きたり。

行宮に類染め迎えし葦津姫 妹の子宿すと打ち明けぬ。

驚き勇む大君は共に伊勢へ知らさむと

旅立ち待ちしその夜間に、次の女と策向かう。

されど大君 岩永を、驚き避くる不首尾なり。

二人 伊勢路は白子宿、策の恨みに種違い

下女囁く惑しに 一夜の験しと疑いて

葦津置き去り大君は夜半に発てり伊勢の路。

覚めて驚く葦津姫、後追い一人 松坂に

来れど閑止め 逢へずして詠もわからぬ戻り旅

ことに気付けし葦津姫、白子の桜に誓い立て

わが妊み 仇種ならば 花萎め

正種ならば 産む時に咲け

三度 念じて足重く三島の里に帰り来ぬ

月満ちて、梅と桜と卯の花の 男子生まれて瑞祥と

届けて伊勢は音もなく

これも覚悟と 柴垣を室屋に巡らせ 火の誓約

焰上がりしその時に富士の八湖の龍神は

たちまち雨を吹き放ち、御子と姫とを清めたり。

坂折の宮に籠りて伏せ暮らす 姫の誓約を知らせては

邑人向かう白子宿 咲き絶えず待つ 桜枝、

驚き手折りて届けしを伊勢の大君所知食す。

大君の亀船急ぐ興津浜 勅は短冊と興津彦

沖つ藻は 辺には寄れども 清寝床も

能わぬかもよ 浜つ千鳥よ

この歌に恨みの涙 解け落ちて肝に応えの徒歩裸足

裾野走りて興津浜

興を並べて帰る宮 諸人揃いてことほぐす

先の淡海は梅の花、高島桜、卯の花 鶺鴒

諸神の所聞食す瑞兆は、皇子らの諱

梅人、桜木、卯木と、木花之開耶姫と宣られたり

天津神、降臨し昔の富士の地に、

若宮柱 太敷き立てて 仲睦まじく歳を経る

咲く姫は月に別れの日垂る時、妊みの峯より神上がる

大君は 朝間に祈る日向にて、高千穂峯より神上がる

神上がる富士は妊みの山となし、

子安の神ぞと咲耶姫 浅間の社に祭りたる

共に秀真の伝えなり

令和三年五月九日

高天原の助けにより 霧島神社境内にて記す

補注

秀真伝とは、「優れた本当の 政 を伝える文書」という意味である。

一方、西暦七一二年に書かれた古事記は大和言葉で、西暦七二十年に書かれた日本書紀は漢語で書かれているが、秀真伝はホツマ文字で書かれている。記紀より相当前に書かれていて、武内宿禰（後職家名）が文書として継承していた。武内宿禰は仁徳天皇までの代々、大臣兼 審神者（さになわ）の要職を務めていた。飛鳥時代以降では、大中臣（後職家名）が宮中の祭祀と審神者を務めていたが、既に血筋は絶え、文書として、多くの祝詞（のりと）として残っている。

本稿は、日本の伝統芸能である長唄の創作のために、木花之開耶姫をテーマとして作詞しているので、歴史書ではなく、偽書でもないが、筆者が解る範囲の平明な大和言葉で記した。所謂「長唄台本の草稿第一版である」。

（令和三年五月三十日 大中臣正比呂 付記）

